

# 紹介

## 釜ヶ崎の歴史を知る図書と

### デジタルアーカイブ

谷合佳代子

エル・ライブラリー

「釜ヶ崎」の歴史を知るための本やネットの情報のなかから、とくにお薦め度の高いもの、レアものを選びすぐて紹介する。

新聞やテレビでは「釜ヶ崎」という地名はタブーになっているのか、決してその言葉で語られることのないこの地域の波乱万丈の歴史、とりわけ戦後史を通観するならば、まずは原口剛著『叫びの都市——寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』（洛北出版、二〇一六年）をお薦めしたい。

一九七七年生まれで鹿児島育ちの著者原口はリアルタイムで六一年の

釜ヶ崎暴動を知っているわけではもちろんなく、大阪人が抱く「釜ヶ崎」や「あいりん地区」への微妙な距離感を肌で知っているわけでもないだろう。だが著者は二〇〇八年の、マスコミにはほぼ無視された釜ヶ崎暴動の場に遭遇してそこに「過去からの声」を聞き取った。ここから著者の釜ヶ崎への地勢学的なアプローチが深まる。

「釜ヶ崎の通史をただ書き連ねただけでは、むしろ記憶を固く冷凍させてしまうことになるだろう。通史は、記憶を単線的な時間へと串刺しにしてしまいかねないのだ」（三二頁）と語る著者は、釜ヶ崎の「アス

ファルトを引き剥がし」、「地下を掘り進めていくような記述を試みた」といい、それは「空間を（動かす）ことでもある」とのべる。

この、わくわくするような研究の枠組みは新鮮に映る。だから、研究視角をのべる本書の序章はじつに魅力的だ。この序章で心をつかまれた読者は、さらに第一章で（釜ヶ崎を掘る）ために大阪港に連れていかれることに目くるめく思いを抱くだろう。

釜ヶ崎は日雇い労働者のまちであり、古くからのドヤ街として知られるスラムを形成している。釜ヶ崎を語るためには、この地域のことだけを語ってはいは半分のことしかみえてこない。日雇い労働者の寝床は釜ヶ崎にあるが、彼らの労働現場は大阪港にあるのだ。戦後、釜ヶ崎の労働者たちは大阪港の港湾荷役の仕事に就いた。だから、釜ヶ崎と大阪港をつないで掘り起こさねば、釜ヶ崎の実態もみえてこない。著者はそ

のような問題意識から第一章「戦後寄せ場の原点」を描いた。機械化され「革新荷役」と呼ばれる前の「在来荷役」の時代、すなわち一九五〇年代から六〇年代の大阪港での港湾労働を著者は活写する。労働者の回想や手書きの作業図はたいへん興味深い。袋を上げ下ろしする手鉤も荷物の種類によってさまざまに存在していたことがこの図をみればよくわかる。まさに労働現場の歴史を物語るその具体的な描写に引き込まれていく。

第二章「空間の生産」で場面は釜ヶ崎に戻る。いつ頃どのようにして釜ヶ崎の居住空間はつくられていったのか、「蚕棚」とも称される

ドヤ街の寝床はどのようなものだったのか。これまた手書きの図や写真によってその様子が伝わる。この章は、「一九六〇年代から七〇年代初頭の釜ヶ崎対策下において、日雇労働力の供給地としての釜ヶ崎が生み出される政治的経過」（一一三頁）が論じられる。釜ヶ崎がどこを指すのかは諸説あり、明確な線引きは従来困難であったはずだが、六六年には行政によって山王・萩之茶屋地区が「あいりん地区」と呼称されることとなり、釜ヶ崎は明確に区分されて都市のなかの「社会病理」地域として指定されることになる。

マスコミによる差別的表象や警察・行政による監視体制など、「釜ヶ崎とは都市の只中に生み出された植民地的空間にほかならない」とのべつつも、一方で著者は「多くの植民地がそうであったように、釜ヶ崎は解放の闘争が激しく闘われた土地でもあった」（一六四頁）と宣言する。「初めに叫びがある」というジョン

・ホロウエイの言葉を引用して、著者は解放への叫びをここに聞くために、読者を次章へといざなう。

続く第三章「陸の暴動、海のストライキ」は六一年の第一次釜ヶ崎暴動と同時期に行われた港湾労働者の国際連帯運動の歴史が語られる。釜ヶ崎暴動は、事故死した一人の日雇い労働者の遺体が警察によって路上に放置されたことに怒った人びと最大四〇〇〇人が五日間にわたって警察署などに放火投石した「蜂起」である。全港湾（全日本港湾労働組合）によって担われた海のストライキと、未組織労働者による陸の暴動には直接の関係はないのだが、同時に起きた二つの出来事は港湾業者をおおいに悩ませたにちがいないと著者はみている。

そして、海からの線が陸へとつながり、港湾荷役の正規労働者の組合であった全港湾が、釜ヶ崎において日雇い労働者を組織化する。それが六九年に生まれた全港湾関西地方建



叫びの都市  
原口剛

## 夜の底、うねり流れる群れ

「流動的下層労働者」たちは、かつて、職や生存を求め、都市空間の深みを掘り抜けた。地と職を、日給一歩一歩一歩を踏み交す。群れとなったのだ。その身体の軌跡は、いかなる空間を生み出していったのか。すでに私たちは「職・経済状況」をわきましている。「寄せ場」の記憶は、今も生き残る筋を辿りよせざるを得ない。切実な争いからなげ、地味を模索する群れとなれ、眠みずからの「寄せ場」をつくれ——過去からの声は、そう私たちに耳打ちしている。

原口剛

アジアの工業化と  
東洋のマンチェスター大阪  
大阪スラムはアジアの驚異的な経済成長の原基形態である  
終章「アジアの工業化とスラム」を書き下ろし！  
刊行時 定価3499円（本体3300円）

設支部西成分会である。しかし同時に機械化の波が押し寄せ、港湾労働の仕事はあつという間に駆逐されていくのである。築港も八〇年代以降は「天保山」として娯楽施設に生まれ変わっていく。港湾から建設現場へと変わった日雇い労働は、労働者たちの気質や組織化の道を変えていったにちがいない。

寄せ場の日雇い労働者を「流動的の下層労働者」と規定した活動家船本洲治の言葉を借りて、著者は釜ヶ崎の労働者たちの集団的な流れを線を追う、彼らの生み出した空間を探ろうとする。

それが第4・5章の「寄せ場の生成」である。ここでは、六一年の暴動の分析からはじまり、労働運動の歴史を追う。それはまた、全港湾西成分会と、そこを飛び出た学生運動上りの若き活動家たちとの路線対立の歴史でもあった。七二年に結成された「釜ヶ崎」と略される組織は全港湾の議会内闘争を批判して直接

の公共空間のなかに生みだされたテナント村のみごとな構造――が「都市に「寄せ場」を取り戻す可能性」を生むものとして、いささか情緒的な言葉とともに煽動される。「地を横断する群れとなれ、君みずからの寄せ場をつくれ」と。

多くの証言と文献からなる本書の、著者の叫びが、囁きが、耳に聞こえるような生き生きとした文体につかまれていく。あとは、行政の動きについて革新自治体の政策との絡みがある少し鮮明にでていたら理解が深まったであろう。

なお、本書には随所で「毎日新聞」大阪市内版の記事が引用されていて

行動へとむかい、また、いまに続く越冬闘争や釜ヶ崎祭りを地域のなかで組織していく。しかし彼らの運動は長くは続かず、警察の弾圧と不況のために七四年には解体状況へと追い込まれていく。

この過程を通じて「寄せ場」という概念が従来の「就労契約の場」という限定的な意味から「居住地区を包括する概念」へと変わっていったという。つまり、寄せ場とは「動的な空間概念」（二六七頁）なのである。だから、寄せ場は釜ヶ崎だけではなく、山谷・寿・笹島へとつながる線があり、労働者たちはその線に沿って移動し、闘いも飛び火していく。

終章においては、バブル経済の崩壊後に釜ヶ崎の労働市場は縮小し続け、いまでは日雇い労働者のまぢではなく生活保護受給者のまぢへと、さらには旅行客むけの安宿街へと変わりつつあることがのべられる。「寄せ場としての釜ヶ崎は、解体さ

る。そのもととなった記事目録は、当エル・ライブラリーを設置運営する大阪社会運動協会が作成したものである。まだエル・ライブラリーが影も形もなかった頃、八二年からはじまった『大阪社会労働運動史』編集の基礎データとなる新聞記事の索引づくりは私が当法人ではじめて就いた業務だ。明治二〇年以後の記事索引は昭和の終わりまで一〇〇年分を集積した。その仕事がかうして新しい本を生むために活かされたことがたいへんうれしく、誇らしく思える。

これ以外にも、本書に引用されている『労務者渡世』などのミニコミを当館で所蔵しているので、興味のある方はぜひ来館閲覧されたい（要予約）。

戦後の釜ヶ崎を掘ったあとは、戦前に戻ってみよう。まず、大正時代の釜ヶ崎などのスラム生活圏について考察した論文集である杉原 玉

れようとしている」（三四一頁）。

ところが、いまでは日雇い労働市場は別のかたちで拡大している。携帯電話で飯場に呼び出されていく労働者たちはデジタル寄せ場に集い、ドヤ街ではなくネットカフェで孤立した夜を過ごす。そこには「群れの熱気や祭りの解放感ほ、かけらもみられない」（三四三頁）と著者は嘆く。現代のプレカリアートはかつての日雇い労働者のように使い捨てられていくのだが、この二者の間には大きな隔りがある。現代のプレカリアートは寄せ場も寄り場もない、分断された労働者なのだ。寄せ場という流動性を失った労働者たちは地下経路を塞がれ、地表へと縛りつけられる。

そこに希望はないのだろうか？ 否、終章において著者は高らかに日雇い労働者を称賛する。野宿生活者の矜持を謳う。その闘いを現在に引き継ぐ、都市公園のテナント村を描き出す。地球を彫刻する行為――都市

井金五編『大正・大阪・スラム――もうひとつの日本近代史』（新評論、一九八六年）を紹介しよう。初版発行から一〇年を経て九六年には増補版が出版され、二〇〇八年には新装版も刊行されるというロングセラーであり、もはや都市スラム研究の古典として読み継がれる必読書の一つだろう。

本書が分析対象とするのは大阪の三大スラムである西浜、釜ヶ崎、東成地区である。それぞれ、部落差別、職業・地域差別、民族差別の対象となり、同時に行政当局からは社会政策の対象とみなされた地域である。

釜ヶ崎の歴史に関しては、第2章「日本橋方面釜ヶ崎スラムにおける労働生活過程」（木曾順子）において近世から近代にいたるスラム形成史が語られている。そして、スラムの住民たちの生業に地域的特色があることがわかる。大正期、日本橋裏通りには屑拾いなどの屑関係の職



「この前の本、ちよつと書き直したから」とみずから大阪社会運動協会事務所に寄贈してきた宮本から手渡されるたびに、若き日の私は老人の執念に恐れ入ったものだ。これら手づくり本をすべて所蔵している図書館は世界中で当館だけである。ぜひ

手に取って見てほしい。

図書紹介に続いては、二〇一九年四月一日に公開された「中島敏フोटアーカイブ」を紹介する。このデジタルアーカイブについては新聞やテレビでも報道された。

釜ヶ崎の五〇年を撮り続けた写真家中島敏はすでに何冊かの写真集を出版しており、最新のものは二〇一八年に上梓された『定点観測・釜ヶ崎増補版』（東方出版）である。中島敏は一九四七年、香川県小豆島生まれ。日本写真専門学校を卒業してカメラマンの仕事をはじめたが人間関係に馴染めず半年で挫折し、六九年に釜ヶ崎にやってきた。みずから日雇い労働者となりながら約二〇年間写真を撮り続けた。その後タクシー運転手となり、『定点観測』のあとがきにあたる「撮

影ノート」で、二十数年ぶりに釜ヶ崎を訪れた中島はこう記している。「立ち呑屋がごとごとくカラオケ店になっていることに驚く。さらに朝の九時ごろになると、ホテルからはじき出された大勢のバックパッカーたちと遭遇する。これ等は以前の釜ヶ崎にはなかったことである」「街をそろいの上着で、清掃して回る集団にもたびたび遭遇する。これも以前にはなかった。聞けば地区の労働組合の要求が実った結果の高齢者特別清掃事業らしい」「釜ヶ崎もとうとうここまで来たのかと信じがたい思いだった。車椅子に乗った高齢者を介護ステーションの人が押している光景も何度も目撃している」（二七六頁）

定点観測という手法をとったからこそわかる、釜ヶ崎の変遷をカメラはじっくり見つめている。その大量のネガ一万枚をデジタルアーカイブで公開していく試みが「中島敏フोटアーカイブ」である。当該アーカ



業に就く者が全世帯の四五%におよんだという。一方、釜ヶ崎では「鯨鯨」と呼ばれる日雇い労働者が六割に達していた。この章では、釜ヶ崎以外のスラムも合わせてその労働実態や家計収入、生活実態、生活環境などを比較分析している。

労務管理、労働史、生活史、被差別部落産業、在阪朝鮮人史、社会事業史を網羅する本書は、「日本資本主義のダイナミズムが生み出す労働力市場の特質や労働生活過程の近代化の把握」を目的として書かれ、多くの評者から評価された批判もつけた。よって、本書は初版ではなく批判への応答が書かれている増補版で読んでほしい。

そして明治・大正時代の大阪「デイトプサウス」を活写した七三四ページの労作、酒井隆史著『通天閣——新・日本資本主義発達史』（青土社、二〇一一年）は外せない。サントリー学芸賞を受賞した本書はその巧みな文体で読む者の目と心と頭をつかんで離さない。第五回内国勸業博覧会が天王寺で開かれたという叙述にはじまり、時代は行きつ戻りつ、天王寺、新世界、釜ヶ崎界隈を彷徨する。そこには無政府主義者の借家人同盟があり、俠客がいて、王将の阪田三吉のすがたもみえる。野武士組という名の労働運動家たち、不遜の変人ジャーナリスト宮武外骨や飛田遊郭の女たち、といった多様な人びとのすがたが掘り起こされ、そして何よりもその土地の滋味が染み出ることくまがあらゆる角度から味わい深く立ち現れる。その中心にあるのは通天閣だ。

当然にも本書の参考文献として当

法人が編纂発行した『大阪社会労働運動史』第一巻が挙げられているし、転載・引用も随所にみられる。これもまたうれしかざりである。

図書紹介の最後に、『通天閣』でも何度も引用された宮本三郎著『アーキスト群像回想記——大阪・水崎町の宿 大正三年〜昭和二〇年サブロ一少年覚え帳』（あ・うん、二〇〇六年）の元本となった手づくり冊子を挙げよう。著者である宮本三郎は、借家人同盟を組織した大正時代のアーキスト逸見直造の三男である。宮本三郎少年が自宅にやってきた社会主義者や無政府主義者のすがたを描いたものが『大正昭和初期の大阪に於ける社会運動家群像回想』（一九八二年）などの私家版冊子八冊である。

ほとんど同じテーマを追い続けて宮本は何度も何度も同書を書き直した。完全な手書き本もあればワープロ打ちだけ業者に依頼されたものもある。装丁・製本は手づくりで、

イブの記述から来歴を転載する。  
 「二〇一九年一月七日から神戸大学人文科学研究所・原口剛研究室に移管。サンプル写真のデジタル化を試行。二〇一九年一月三十一日から共同利用・共同研究拠点である大阪市立大学都市研究プラザのアーカイブ設備と記録と表現とメディアのための組織の技術協力でスキャン作業を開始。二〇一九年四月一四日、複数の機関で共同運用中のデジタルアーカイブ基盤に参照用リポジトリとして公表」



今年四月以降に公開されたネタの件数は七月五日現在で三八五件（デジタルスキャン済みは約二四〇〇件）。中島が釜ヶ



ない男たちがぞろぞろとついで行っている。様子が写されている。こういうデモ風景の移り変わりも定点観測ゆえにわかる

ことだ。

このフォトアーカイブはキャプションが不足していたり、操作性がいまいちよくないところなど、まだまだ改善点は多いのだが、プロジェクトははじまったばかりであり、今後への期待が高まる。

このアーカイブが公開されているサイトは、「A to M」という無料配信されているシステムを使用しており、大阪市立大学特任講師櫻田和也によって構築された。「A to M」は Access to Memory の略で、国際文書

崎にきた六九年からデジタルカメラに換えるまでの九五年までのネガフィルムが原資料となる。写真集『定点観測』では別人が撮影した戦前の写真も収められているが、このフォトアーカイブでは中島が撮影したものだけに限定し、さらにデジタル撮影のものを除くため、撮影期間は二六年間である。メタデータ（目録）とコンテンツ（画像）を提供する「デジタルアーカイブ」というシステムの一つだ。

このフォトアーカイブでは掲載順に写真を閲覧することも年別に編成されたアルバムごとに関連することも可能である。デジタル画像処理された写真は、往時の釜ヶ崎のまち並みと人びとを生き生きと写し出している。

たとえば、「1973-05-01」と題されたパートには一八枚の写真がふくまれている（<https://atom.log.osaka/index.php/sn01-004-p04>）。そこに写っているのは釜ヶ崎メーデーに集う労

働者たちのすがただ。

写真にキャプションがついていないので推測ではあるが、そのうちの一枚に「第四回釜ヶ崎メーデー」という文字が書かれた横断幕が



みえるのでまずまちがいないだろう。ヘルメットをかぶった新左翼系と思われる若者も散見される。警備の機動隊員も写っていて、全体として意気盛んな労働者たちのすがたが群れとなって画面に溢れている。翌年のメーデーの写真でもやはりデモの隊列がたくさん撮られている。これが七五年になるとヘルメットすがたの若者はみられなくなり、デモ隊もなぜか散漫で、たんなる野次馬なのかデモ隊の一員なのかよくわから

（謝辞）

本稿執筆にあたっては、櫻田和也氏の多大なるご助言・協力をいただきました。記して謝意を表します。

館評議会（ICA）基準に基づいたアーカイブ記述アプリケーションである。このシステムに基づくコンテンツを掲載しているサーバーには、当エル・ライブラリーのアーカイブズもその一部を記録記述しており、さらに大阪市立大学の「上田貞治郎写真史料アーカイブ」も掲載されている。つまり、一つのドメインを三つの機関（記録と表現とメディアのための組織・大阪市立大学都市研究プラザ・大阪産業労働資料館）で共有しているのである。英語の規則しかなかった目録記述標準を日本語に訳すところからはじめたものなので、試行錯誤の苦勞を重ねているが、今後コンテンツとメタデータ（目録）の充実をはかっていきたい。

中島敏フォトアーカイブ

<https://atom.log.osaka/index.php/sn01>

Since 1968



Make your dream  
We will print it

当社が誇る最高の設備と、  
「Japan Color 標準印刷認証」取得の確かな技術で、  
高品質な印刷をお約束します。

原多印刷株式会社

〒531-0061 大阪市北区長柄西 1-7-43  
TEL 06-6882-3555(代) FAX 06-6882-3545

URL <http://www.hrt.co.jp> e-mail [info@hrt.co.jp](mailto:info@hrt.co.jp)



標準印刷認証  
JC-S004502-05  
原多印刷株式会社 本社工場



## 編集後記

本号の特集テーマは「西成特区、釜ヶ崎、未来へのまちづくり」である。釜ヶ崎（西成区・あいりん地域）はいまでもなく日本最大の日雇い労働者の寄せ場であるが、本誌で「釜ヶ崎」についての本格的な特集を組んだのは、一九九四年の「釜ヶ崎労働者の現在」（一〇三号）が最初である。以後、本誌では「都市とホームレス政策」（一二四号、一九九九年）、「釜ヶ崎の現在」（一六四号、二〇〇九年）と「釜ヶ崎」についての特集を組んできた▼最初の特集はちょうどバブルが

崩壊し、日本経済が長期停滞に入る時期にあたる。各特集に寄稿された論文のタイトルは今号一七ページを参照していただきたいが、この四半世紀に不安定雇用、ホームレス、就労支援、保健、さらに最近ではジェントリフィケーションなどさまざまな社会問題が、釜ヶ崎という地域において先鋭的にあらわれていることがわかる。この時期を通じて、かつて日雇い建設労働者を供給して高度経済成長を支えた釜ヶ崎は、労働者のまちから高齢者のまちへと大きく変貌している。その一方で、まちが変化しつつも人びとの生活はそこにあり、貧困と孤立という変わらぬ問題は厳然と

存在している▼またこの時期は、本特集のありむら論文にもあるように支援団体・福祉団体・地域団体などによる幅広い連携が生まれた時期でもあった。さらに、これまでの特集でも釜ヶ崎の抱える個別問題への「対策」ではなく、総合的な「政策」が必要であると多くの論文で繰り返し指摘されてきたが、「まちづくり」という発想が強くなってきた時期でもある。そのようななかで「あいりん地域まちづくり会議」をはじめとする「場」が生まれ、昨年だされた「まちづくりビジョン有識者提言」。未来へのまちづくりがどう実現されていくか注視したい。

（編集部）

## 市政研究

No.204 2019年7月31日 (夏季号) 850円

編集・発行 大阪市政調査会

大阪市中央区瓦町2-4-7 新瓦町ビル7階 〒541-0048

TEL (06) 6209-2465 FAX (06) 6209-2450

URL <http://www.osaka-shisei.jp> E-mail [info@osaka-shisei.jp](mailto:info@osaka-shisei.jp)

振替口座 00970-6-7205 印刷・原多印刷株式会社